

# 黒猫はどこからきたか

## その二

—精神分析批評から神話・元型批評へ—

福田 立 明

岐阜大学教養部英語研究室  
(1982年10月12日受理)

### Where Did the Black Cat Come from? II: From Psychoanalytic Criticism to Myth-Archetypal Criticism

Tatsuaki FUKUDA

#### 1. フロイトからユングへ

夢の象徴表現に類似した形式で語られているポオの作品を解説しようとするとき、フロイト理論を基礎とする精神分析的文学批評は、本論文前篇で見たように<sup>(1)</sup>、作品形式に関与する心的メカニズムの面でひとつの驚異的洞察力を発揮することが認められる。ポオの小説は、この方法論の導入をまっとうして、はじめてたんにアメリカ・ロマン主義文学のグロテスクな想像力が産み落としたゴシック風小説としてでなく、意識と無意識の裂け目から覗き見られた魂の奈落にあるものの詩的言語表出であることが、ひろく認められるに至ったといつてよい。こうして精神分析批評は、従前の伝記的研究に助けられながら、創作者個人の心理の深みに入りこみ、創作衝動の起点エネルギーを探りあてることにより、衝動充足の補償様式である〈昇華作用〉として象徴言語表現が創出する構造を解明する手段として評価されるのである。その一方、芸術作品を〈快樂原則〉と〈現実原則〉という対立原理の支配下にある願望充足補償の産物と見なすこの精神分析批評では、対象作品がこの方法論に免れがたい生物学的、個人的原理の制約のために、ある程度まで卑小なもの、また限定されたものに還元される危険がつきまとう。この事実は、皮肉なことにかえてこの批評方法を一時期アメリカ文学研究の主潮にまで押し上げるのに役立つように思われる。作品が個人的で卑小な対象と見られることにより、批評家たちは容易に小説の語り手や作家のなかに〈病的症例〉を発見し、彼らを——きわめて筋違いのことながら——道徳的、倫理的規範の高みから批判することができた。つまり精神分析批評は、アメリカ文学批評の土壌につよく根づくモラリスト批評の風土に誤まって適応させられる危険な要素を帯びていたのである。当然のことながら、その最大の犠牲者はポオ、ホーソーン、メルヴィル、ホイットマンといった19世紀ロマン主義の詩人、作家たちであった。

では、フロイディアンの精神分析批評が欠落させたものはなんであったのか？ この問い

には抽象的な答ではなく、論文前篇で検証した方法論と対比し、フロイト学の発展体系としての Carl G. Jung (1875—1961) の分析心理学の視座にも身を置きながら、「黒猫」をさらに重層的に考察する過程で答えていきたい。その過程は当然、作家ポオの個人的深層心理のコンプレックスから、彼の読者もが共有する〈集合的無意識コレクティブ・アンコンシヤス〉やそこから生じる〈元型的イメージアーキタイプ〉へと向かうであろう。ポオ文学、なかんずく「黒猫」のような作品では、ユンクの〈アニメ〉(およびアニムス)の概念<sup>(2)</sup>の適用が要請されるので、それについて最小限の了解をしておくことは必要であろう。アニメ(アニムス)は男(女)という外面的人格を補填するかのようになり、反対の性の人格要素として内にひそむ内面的人格を指す。それは理論的概念でなく、「いかなる男性もいっさい女性的なものを持たぬほど完全に男性的ではない」<sup>(3)</sup>という経験則から出発している。この「男性の体内の少数派たる女性遺伝子の心的あらわれ」<sup>(4)</sup>は、通常男性にあっては抑圧されるから、これが無意識のなかで女性的像を結び、逆に彼の無意識への橋渡し役を果たすものと考えられる。アニメ概念は、文学研究以外に広く人文・社会諸科学——なかんづく神話学、比較宗教学、文化人類学、構造分析論など——で重視されつつあるが、それは本論でも触れる〈対をなす男女神デュエジューギューア〉、〈男女両性具有ヘルマプロディトス〉神話、グノーシス説などばかりか、陰陽五行説や日常的な男女関係のさまざまなモチーフ形成、象徴作用にふかく与っていることが感じとられているからである。

ユンク心理学を方法論として文学作品の分析に具体的に应用するのは容易なわざでないけれど、その一例としてアメリカ人研究者がそれを図式的に適用した短い「黒猫」論<sup>(5)</sup>が手もとにあるので、まずこれを概観してみることにしよう。論者 Roberta Reeder によると、「黒猫」は語り手主人公による、黒猫として現出した自己のアニメの抑圧、支配、追放、封じ込めの試みがことごとく失敗に帰する物語として解釈される。プロットの順にしたがってその分析を要約すれば——まず語り手は第一の黒猫の片目をえぐり取ることによってアニメを支配しようとするが、それをねじ曲げるだけであり、黒猫絞殺というアニメの具体的抑圧も、ただその再現をおくらせるにすぎない。事件の夜の火事は、本能の力を祓い清めようとする願望を象徴し、焼け残りの壁面上に再現する猫の形姿は、アニメ追放の失敗を表わすはずである。この幽霊から逃れるために代わりの猫を見つけるのには成功するものの、おのれを脅かし恐怖に陥れるものとしてのアニメに対する彼の態度は、猫の胸もとの白毛の絞首台模様となって現われる。残虐の度を加えた語り手は黒猫の代りに、自己のアニメの女性象徴たる妻を殺し、いまや意図的かつ細心にアニメを心理的な壁のなかに塗りこめて塞ぐのに成功する。しかし理性による意図的抑圧が強まるときこそ蓄積されたエネルギーは最大になり、閉じこめられたアニメとしての猫は咆哮の叫びをあげる——。

リーダーにとってこの物語は“the drama of the anima's struggle for expression”<sup>(6)</sup>という心の寓意劇であり、そこで語り手は「自己の非理性的衝動に対しなんらかの肯定的関係を形成する代りに、みずから『片意地』と呼ぶ抑えがたい力、彼の理性的意志がなんとか息の根を止め消滅させねばならない力、の無力で受動的な代行者になりさがることを選ぶ」<sup>(7)</sup>と批判される。前篇で論述したフロイト学に基づく精神分析批評とは異なり、たしかにここでは、作家ポオ自身の伝記や個人的な精神病理分析の知識の助けなしで、作品をある程度まで普遍的人間精神の内面劇として解釈できる利点がある。その一方で、前篇で検討したテキスト中の黒猫と語り手の妻の両者をテキストの背後にある作家の母の仮装の姿とするボナバルト女史の解釈が脱落させたのに劣らぬほどのものを、ここでも両者を語り手のアニメという専門用語に置き換えることによって解釈の網目から落としてしまったのではなからうか。黒猫とアニメを直結する単純化については後述するとして、問題にしなければならないのは、こ

でも論者が自論展開の批判的出発点とした James W. Gargano の「黒猫」論<sup>(8)</sup>と同様に、あたかも語り手主人公が無意識に発する力を肯定的に同化するか、それとも抑圧するかを自由意志で選択する余地が残されていたかのような前提から論が進められている事実である。作品の冒頭で彼は自分が興奮しやすい性質であることを告白しており、語り手のレベルでは論者のいうアニメの抑圧は事件の時点でもはや選択の余地のない心理的強迫となっているのであって、その前提の上でしかこの作品の語りが成立しないのは明きらかだとせねばならない。リーダー女史の所説さえもが、フロイトであれユングであれ心理学体系の学問的図式だけをそのまま文芸批評に適用しようとするとき、モラリスト的アメリカ文学批評の風土に取りこまれる危険性が多分にあることを暗示しているように思われる。

文学批評に精神分析的観点を導入することが積極的な意味をもつとすれば、それは創作——広い意味では読書行為も含めて——に関与した無意識過程に、個人なり集団なりの夢や文化がなした作業の跡をたどり、象徴や形象による深層の意味論になんらかの意義を見出だしてやることであろう。作家論的観点からもっとポオに即していえば、彼の深層の幻想構造の言語表現が、それがもつ心理的補償作用を通して自己調整機能を果たし、それによって内的均衡と魂の全体性の回復が計られるのを認めることである。さらに読者論的ないい回しをすれば、作者の言語的想像力によって日常的自我意識の地平のかなたの元型的イメージの世界と出会い、それが企図する魂の全体性回復のもつ超越的機能を通して人間存在の実体と意味に気づき、みずからの実存を了解するのを評価しようとすることである。とはいえ実際には、夢の解釈法に準拠する精神分析が開示するのは、人間本性に基づくものである限りにおいて根源的ではあっても類型的であり、ほとんどが複雑な分析過程の期待を裏切るようなありきたりの内容になりがちである。芸術作品に内在するそのなにかのいっそうの深みに達することをめざして、さらにユング学派の方法論によるポオ批評に目を通しながら、それを補う視点として元型批評<sup>(9)</sup>のアプローチへと進んでみたい。

## 2. 語りの基本構造

ユング学の成果を19世紀アメリカ・ロマン主義文学研究に本格的に採り入れようとした Martin Bickman (1945—) は、その著書<sup>(10)</sup>で“Animatopoeia: Sirens of the Self”と題する一章<sup>(11)</sup>をポオに振りあてている。標題が示唆するようにアニメ形成を焦点に置き、副題を読みかえれば女主人公たちを「自己を死へと誘惑する者」<sup>(12)</sup>と見なす立場から代表的作品4篇<sup>(13)</sup>に限定してポオを論じるので、本稿の直接的な対象である短篇「黒猫」へは言及がされていない。分析心理学の方法論に立つと、女性作中人物は心的要素の客観化されたものと見なされ、物語はそれらの諸要素の内面劇として解釈されるが、ビクマンは女性仮象を〈根源的〉女性と〈変移的〉女性——換言すれば〈恐ろしい母〉と〈アニメ〉——に分けた上で、そのおのおのに肯定的な面と否定的な面がありうると分類する。あえてこの図式に当てはめるとすれば、黒猫に恐ろしい母としての否定的な根源的女性元型が、妻に肯定的アニメ像が指定される。語り手の自我意識がどうしてもわが魂から抹殺せざるをえなかったのは、無意識の深みに巣くう恐ろしい根源的女性像であったが、その抹殺は同時に魂の導き手としての肯定的アニメのいのちをも断つことにつながるという寓意がここには含まれていることを留意するとどめて、いままこし作品に沿いながらその構造の分析を進めてみよう。

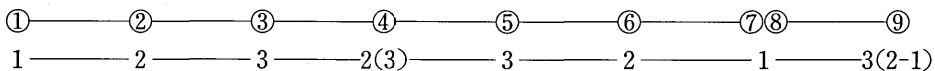
「黒猫」は語り手と主人公が同一人の一人称話法が用いられ、作者と語り手主人公という一元的な関係で眺められるという意味では語りの構造は簡単のように見える。ただしプロット進行の語りとは別に、物語中すくなくとも2箇所にかなりながい語り手の所感が述べられ

ているが、この語り手の声にポオの肉声を重ね合わせて聞く読者もいるはずである。

.... To me, they [a series of mere household events to be told] have presented little but Horror—to many they will seem less terrible than *barroques* [*sic*]. Hereafter, perhaps, some intellect may be found which will reduce my phantasm to the common-place—some intellect more calm, more logical, and far less excitable than my own, which will perceive, in the circumstances I detail with awe, nothing more than an ordinary succession of very natural causes and effects. (M. III. 849-850. Italics Poe's and brackets mine.)

ここで語り手が「畏怖におののきながら語る出来事のなかにごく自然な因果関係のつながりをしか感じない」知性の持主とは、語り手というよりはむしろ作者が予感した冷静な知性の持主であり、もしそれが作家ポオ自身の理知的な一分身——たとえば彼の創造になる名探偵 Chevalier C. Auguste Dupin のごとき——を想定したものでないとしても、作者による読者の知性への一種の挑戦ではある。しかし作者が描こうとするものの焦点にあるのはあくまでも自分にはまったく異質な激情を伴う意志に捉われた男の話であって、そのために言語伝達がきわめて困難な核心部をもつ物語をいやしくも語ろうとする限りにおいて、作者はこの悪霊の不意打ちをくった語り手主人公の側にあるとしなければならない。ここで語り手と作者の関係は、臨床心理学の比喩を使えば、精神の極限状態に発するような恐怖の悪夢に捉われた患者ポオと、その夢の解釈者としての医師ポオの関係と見ることができよう。患者が心の深みから受け取った象徴的な夢の手紙が読者の心の深みに届けられる可能性は、ただひたすら私たちのうちのなんびともみずからの与り知らぬ衝動や意志の犠牲者たることからまったく免れることはないという措定にかかっている。ポオはこの作品を書くことによって、この理不尽な激情としての悪霊に襲われながら哲学や宗教からさえ救いの手を差ししのべられない人間の魂の擁護者の側にあることを、鮮明に宣言しているのである。

「黒猫」は家庭内部の事件なので、共時的に見ればその当事者はいつも、主人公、その妻、黒猫に限定される。便宜的に拙論前篇のプロット表番号に沿ってその展開の時間軸にしたがい登場者数（下段）の移り変りを表わすと、つぎの数列が得られる。



登場者数の1なる数値が出る局面に注目すると、他者存在の介在が意識される以前のプロット表①では、主人公は生きものに愛情を抱き、生と調和状態にある。妻の殺害後黒猫も姿を消して安眠する⑦—⑧でも、主人公の意識は総合され束の間の自足的調和が取り戻されている。⑨の括弧内に含む1は、主人公処刑後の〈死神〉と妻の遺骸との複合体への主人公のありうべき合体を暗示する。この語られざる結末の数値1は、「最初のもの根源的な単一状態には、次代のすべてのものの続発すべき原因が潜んでいると共に、それらのものの必然的な破滅の萌芽も潜んでいる」(V. XVI. 185-86<sup>(44)</sup>) という“Eureka: A Prose Poem” (「ユレイカ」1848)における一般命題に照らすとき、はじめの1へと結びつき、数による物語の円環構造を示唆することになる。

数2は、主人公と妻(② ④)、主人公と黒猫(⑥)で現われるが、プロットの上でほんの

瞬間、推移的に生起するかに見えるにすぎない。2が真に具現するかに思われるのは、主人公と黒猫・妻の屍体の複合体（⑨の括弧内）という仮定された形式においてで、ここではじめて自己と他者の対置——魂の両極性へと内面化していえば、自我と非我、意識と無意識という本来の対置構造が現われる。ただしこの最終タブローにおいてさえ殺人犯として処刑抹殺さるべき前者は、死において受け容れられるかもしれぬ後者との合体を通して、1に帰る推移の過程にあると考えられなくもない。この観点からすれば、この物語には分裂した自己のあらゆる対立命題を死において再統合するというロマン主義的超越志向が作用していると結論してよからう。

3なる数値こそが語り手が無意識のうちに求めたものであることは、ブルートー殺し直後（④）でさえ壁面に浮き出る猫の幻の形を取ってまで3の成立がはかられることから推測されよう。いうまでもなく3は、三位一体の元型に明きらかなように聖別された数である。3が図像化された三角形は、タロット体系の象徴では<sup>(15)</sup>、円と類縁関係にある〈天〉として聖霊を指示するとされるが、この物語の三角構造による〈魂〉の解釈の強制は、自我意識の対決者たる無意識が妻と黒猫という対照的表象を借りて二極分化していることを表わしている。ここには自我意識と無意識との統合という問題以前に、ビクマンの図式を応用すれば、否定的な根源的女性像と肯定的アニマに分裂した無意識構造の統合という課題が出されていて、その統合による自己超克の可能性が暗示されている。しかし聖なる霊としての魂への固執さめやらぬロマン主義的心性にとって、神聖なるべきその三角構造の一角を古代的な恐ろしい女性表象が占める魂の自己超克とはいかなる様式を要したのか。ここでありうべきひとつの形式として神話元型との出会いを考えてみよう。

### 3. 神話・元型的背景

物語の構造分析で固執されているのが知られる三者間の葛藤が中心主題となり、しかも〈世界霊〉とも呼ぶべき〈魂〉を語る古典神話として〈プシューケー：エロース：アプロディーテー〉の物語がある。嫁いじめの民話が混入され、2世紀ローマの作家アプルーレイウスによって広められた伝説では<sup>(16)</sup>、プシューケーは禁じられた恋人の寝顔を見たばかりに逃げさせたエロースを求めて各地をさまよい、姑アプロディーテーの命ずる苦行に苦闘し、その苦難を通して人の娘が不死の神々の領域に受け入れられるさまが語られる。すでにポオの詩“To Helen”（1831）において、「手のうちに瑪瑙のランプ」（M. I. 166）を持って彫像のごとく立つヘレンが最後に“Psyche”と呼びかけられているが、この詩にプシューケー伝説を適用するビクマンは、詩人の意識と無意識とがヘレンを焦点として合体し、ところが原初的統一、つまりまったき魂に回帰したことを示すものと解釈する<sup>(17)</sup>。短篇「黒猫」にとって神話モチーフが照応するのは、自我のかけがえのない片割れというべきアニマ（妻）が死神ブルートー（黒猫）の犠牲に供されるように、〈魂〉が怪物としてのエロースへの人身御供とされ、さらにエロースとの合一が達成されるまえに〈恐ろしい女神〉の課する一連の試練を経ねばならない点で、これは本来の人間の魂の危険に満ちた状況と、物質的な実体を喪った影のごとき靈魂の再生の条件をさえも暗示するのかもしれない。

エロースは、ヘレニズム時代以降アプロディーテーなど豊穡女神の息子に系譜化され〈愛の神〉として擬人化される以前には、もともと人間の心身を慄かせ萎えさせる恐るべき原初の方で、なにものをも征服しあらゆるものを結びつける力であった<sup>(18)</sup>。このような根源的力がポオの近代的自我にとって固有領域を越えた〈異界〉に属するものに見るのは言をまたない。〈異界〉に属する神の姿をプシューケーが見ることを禁じられたように、近代自我にも

目をそらさねばならぬアニメの否定的の形姿がありうる。プシューケーが深夜ついに禁を破り、燭台の火を〈野獣〉の頭上にかかげようとしたとき、彼女が剃刀を手にしてしたこと——つまり男性（それに宿る野獣性）を憎む母性の力に駆られていたこと<sup>(19)</sup>、を私たちは知っている。「黒猫」の主人公が根源的女性としての否定的アニメ（黒猫）の抹殺をはかるのは、プシューケーが怪獣としての否定的アニメの抹殺へと駆られたのに対応すると見なされる。ただし小説の黒猫には女性性の根源的自然性（獣性）ばかりでなく、主人公の男性的野獣性への怖れも投影されており、実際には複雑な心理要素が負荷された形象となっていることを認めねばならない。ポオ神話に即して付言すれば、妻を愛し獣を憎むという葛藤に直面するのは、それまで天上的な愛の楽園で暗闇に隠されていた妻の女性性の自然的存在としての一面が燭台の明かりを浴びようとすることを意味する。嗜血を契機として、20歳にならんとしたヴァージニアが処女性なる天上の輝きをのみ崇拜される段階から母性へと繋がる真の女性性に目覚めようとしていたという本論文前篇の仮説は、この推論にひとつの足がかりを与える。プシューケーは悪霊の生贄に捧げられる花嫁として、アポロンの神託にしたがい死にいく婚礼の粧いに飾られて岩山の頂に置かれるが、ここには母と娘の共同体から男性という異境的荒野への女性性の強奪による分離が死の陰喩で表わされている。ポオが父方の叔母クレム夫人に母性的愛情を求めながら彼女とヴァージニアの母娘共同体のなかへ繰り込まれていった伝記上の事実、死で比喩されるような母からの娘の分離を物理的にばかりか心理的にも困難にさせていた。死の結婚の神話元型は、こうして作品中に定置されることになるのである。

「黒猫」の惨劇を死の結婚の神話元型的悪夢と見る視点は、黒猫に主人公（または作者）の無意識の所与ばかりか、妻（またはヴァージニア）のその投影をも認めることを許すように思える。黒猫の片目の欠損は夫婦間の愛の一面の欠除を形象するが、酒乱と片意地によって夫が失なわれるにしたがって彼女の黒猫への傾斜は強まったのであろう。ついには黒猫に向けられた夫の斧をわが身に受けて、現世の男とではなくアニメス形象を帯びた神靈的存在との死の結婚という運命を受け入れるに至る。

物語の最終場面は現場の関与者たる主人公と警官隊、それに読者のすべてを恐怖で竦ませるが、それは私たちの意識にもまだ知られない秘密の象徴群に包まれているからだろう。ただ直立した妻の屍体の頭上に真赤な口を開け、火のような片目を見開いた黒猫が乗っている静止画像から〈死神〉プルートーンによって地底の冥界へ強奪された乙女ヘルセポネーの死との類比を認めることはたやすい。〈デーメーテル：ヘルセポネー：ハーデース〉神話もプシューケー伝説同様に3を基本構造にもつ神話であるが、神話学者ケレーニィによれば、花嫁ヘルセポネーの強奪は死の比喩であり、処女喪失と冥界への境界を越えることは比喩として同義語にあたるという<sup>(20)</sup>。さらにユンクは、女性におけるコレエの精神分析的症例として、この元型的乙女と母親が動物の姿で現われることがあり、その代表的な動物が猫や蛇や熊などであると指摘している<sup>(21)</sup>。ここで「黒猫」の主人公がいくつもの愛玩動物のなかでとくにプルートの存在を意識する契機を考えると、この猫の利口さを話題にするときすくなくならず迷信ぶかかった妻が「黒猫はみな魔女の化身だという昔からの言いつたえをよく口にした」(M. III. 850) ことにある。妻のこの洞察は、迷信に染まっていたからというより彼女のアニメスによる確信の表明であり、主人公の脳裡に妻と黒猫が関連づけられる機縁をなししている。またこのような女のアニメスの表出は男を苛立たせるのがつねで、彼が妻に潜在的な敵意を抱くひとつの背景となっている。たしかに魔女が跳梁した中世ヨーロッパでは、黒猫は魔女の化身、仲間、ないし使者とされたが、たびかさなる魔女狩りにもかかわらずそれが現われるのをやめなかったのは、彼らを二千年の長きにわたり悪霊の攻撃や狂乱、意識喪

失など魂の危険から守り通してきたと信じられたキリスト教信仰という心の防御柵が、すでにその歴史のなかば過ぎから破れ目を現わしはじめていたことを表わしている。父・子・精霊の聖なる三位一体のドグマから締め出された女性的原理と、かつてはそれを担いながら追放された異教の女神の怨霊たちは、人びとの無意識の深みから魔女の悪夢を送り続けた。ポオの主人公を巻きこむのも、旧世界の辺境にまで持ち越された悪夢の渦のひとつだったのだ。むしろ死神が黒死病の衣をまとって猖獗をきわめた中世において、疫病の根源で同時に媒介者だった鼠の天敵としての猫が聖化される心理学的余地はあったかもしれない。菌感染による疫病という科学知識はむしろなかったとしても、すでに古代エジプトにおいてさえ穀物畑や穀倉を鼠害から守るもの——多分そこから豊穰・結婚の守護女神——として牝猫頭バステイト女神＝牝獅子頭サクメト女神への信仰があった。これはやさしいバステイトと血なまぐさいサクメトのいずれにも変容する二重の女神であり、エドフゥの司祭たちはこの戦争、災害、病気をひきつれたサクメト女神をたえず鎮める必要から、特定の儀式書を用意していたといわれる<sup>(22)</sup>。このような神話元型を背景に帯びる動物の形象で表わされたものが喚び起こされ、主人公の暴虐の対象とされるとき、そこになんらかの情緒的眩惑や戦慄感が生ずることは容易に想像される。

フロイトでは作家個人の母から生ずるものとされた黒猫の影響力は、ユンクにおいては、「実の母から生じてくるものではなく、むしろ母に投影された元型が母に神話的背景を与え、それとともに権威を、さらには聖性を付与する」のであり、また「とりわけ顕著なのは、小児の恐怖症にしばしば認められるような、明白に神話的形象が登場する場合であって、母は動物、魔女、妖怪、人食い、両性具有者などとして現われるのである」<sup>(23)</sup>と説かれる。ここで列挙された根源的母親元型のまとう形姿は、すべて「黒猫」の最終タブローのなかに暗喩的に含みこまれていると見なしてよかろう。「黒猫」の語り手を中心とする作品論的なレベルでは、ユンク学に基づく神話・元型批評は黒猫の出処と物語についてこのような一般的な形での解釈の道筋を与えてくれはする。しかし、ことエドガー・ポオにあっては、たとえ推論が猥雑に至ろうとも、黒猫の出処の問いは作家論レベルに到達せぬかぎり問い尽くされたという満足感がえられない呪いがかかっているように思われる。ポオ夫妻にとって、魔女の化身となって表わされるものはなんであったのか。それは単一の答えでは表わされるものではないが、もっとも個人的な深層心理から考えれば、現実にはエリザベス・ポオとマライア・クレムとして実在したふたりの母である。ことに娘夫婦より長生きしたクレム夫人にとって、花婿のポオは自分から娘を奪い去る見知らぬ男ではなく、血縁の甥であり自分に母性愛を求める事実上のもうひとりの息子エディにほかならなかつたろう。こうして若いふたりは執拗な猫の片目のように自分たちに目を注ぐ彼岸と現世のふたりの母を持つことになる。しかし真の結婚の成就是、プシューケー神話が語るように、母との心理的紐帯を断ち切り、そのような血縁共同体の崩壊と更新を必要とするものである。物語中の火事、殺人、屍体の隠蔽、その露頭という一連の悪夢的継起を追ってみると、そこにふた組の母と子の血縁紐帯に対抗してあたらしい世代の男女の婚姻関係の成就、いかえれば真の花嫁への変容を可能とする、娘の強奪による〈死の結婚〉の達成の夢と、それによって太母の母親の怒りをこうむる悪夢が読みとれる。

もちろんこのような個人的な無意識のコンプレックスは、作品化の経過において古代的、神話的性格の心象を帯び、読者にもある種の畏怖感を生じさせ、特殊な意識の変化を及ぼすはずである。そのプロセスの一端は、第一の黒猫に古代異教の冥府王の別称が与えられることにもうかがわれる。これには作品執筆時、咯血が続く妻ヴァージニアを傍らにして、死が

はげしい強迫親念になっていたこととかかわりがあることについてはすでに前篇で考察した。恐ろしいハーデースの本名を口にするのは忌むべきことだったから、彼はプルートーン（富者・富を与える者）をはじめいくつかの別称と呼ばれ、死の神であると同時に冥界、〈墓〉、〈死〉をも意味した。ローマでの一呼称 *Dis Pater*（父なる神）への公けの崇拝は、シュビレー予言書により西暦前 249 年にプロセルピナ（＝ペルセポネー）崇拝とともに始められたが<sup>(24)</sup>、パテルは冥府の女王との区別の必要上つけられたものであろうから、黄泉の神格が〈一對の男女神〉化される必然性がギリシア、ローマ両古代世界にあったことをうかがわせる。ある興味ぶかい仮説によれば、エトルリア起源と信じられる死の神のローマ名 *Orcus* がもしもギリシア、ラテン両語で〈熊〉を意味する仮説的共通語源 *orc(s)os* から派生すると仮定すれば、オルクスは熊だったのかもしれないとされる<sup>(25)</sup>。また狼や熊の毛皮の冠を着けたハーデースの Fresco 画もあることから、〈一眼の巨人〉から与えられたハーデースの隠れ帽は狼か熊の毛だったろうという推論も成立しよう。死こそ飽くことなき人喰い鬼 *ogre* (prob. fr. L. *orcus*)<sup>(26)</sup> であるから、冥府王とは人を喰うと信じられた動物の毛皮を被った〈神霊〉であり、その点では猫科動物に資格が欠けるわけではない。ポオのプルートー（と後継者）は、母に怯える子の無意識のなかで巨大猫科動物の人喰い牝獅子サクメトにまで自己増殖した黒猫であり、それ自身が毛皮をまとった神霊にはかならないから、だれしもそれをすっかり殺すことはできない。主人公が重ねて口にする黒猫への恐怖感、屈強の警官たちをすら立ち竦ませた最終光景のもつ“extremity of terror and awe” (M. III. 859) の背後には、その名を口にするのさえ憚られる恐ろしい神への畏怖感があったのである。

ハーデース神話の核心は、それまで男神独裁支配の死者の国が死の花嫁の入籍により、ユンクのいう〈一對の男女神〉の支配する領域に変わる経緯が物語られる点にある。生氣溢れる黒猫と妻の屍体とで構成される地下室壁面内部の冥界は、冥府王による処女掠奪の神話的構図と奇妙なほど心象上の対応をなすように思える。この作品の最終の啓示のなかに、ポオの妻ヴァージニア死後の再生の夢、あるいは処刑さるべき主人公にわが身を重ねた上での〈死における結婚〉の夢を読みとれぬものだろうか。Sir James G. Frazer (1854—1941) はこの神話が冬を地中で越す麦の神話であることを論証しているが<sup>(27)</sup>、喪われた娘が取り戻されたとき、母神デーメーテルがいったんは不毛に化した野を黄金の穂波打つ豊饒の地に一変させ、それとともに、土地の諸公にのちにエレウシースの秘儀として著名になる聖なる儀式を示現した意味を強調している。この神話の最古の版と考えられるホメーロスの「デーメーテル讃歌」が密儀執行の手本と起源を暗示し、他方密儀において両女神の神話が聖劇として演じられるというように、神話と典礼がたいに説明しあう表裏一体の関係にあったとされる<sup>(28)</sup>。それにちなんでいえば、テキストとしての「黒猫」と夢見者としての作者の無意識の様相とは、たがいに説明しあい確認しあう関係にあるといえる。不滅の神的靈魂を表わす動物の冠——九たび生き返る猫、冬眠熊の暗喩としてのプルートー——を頭上に戴き、立姿のまま埋められた妻の最終的構図は<sup>(29)</sup>、あたらしい生命としてふたたび萌え出るために地中に埋められた麦の種子のアナロジーにおいて、霊的存在としての魂の彼岸における真の誕生を用意するものとして、肉体の死と埋葬の思想をいみじくも映し出していると思われるのである。

#### 4. 無意識様相の投影劇を通して

殺人犯罪を語り手みずから告白するポオの小説<sup>(30)</sup>から読者が感ずるのは、客観的な動機が不在で、犯行の必然性が意識的には納得できないことである。被害者はいつも故なき脅迫感



を語り手に与える〈他者〉存在——ドッペルゲンガー、老人の眼、魔女の化身——であり、語り手はそれを認識することによって壊された自足的調和を取り戻したい衝動からその存在の抹消をはかるというパターンを取る<sup>(31)</sup>。「黒猫」ではその点異例ともいえるほど語り手は自分の行為の不合理を語り、犯行に駆り立てたものを“the spirit of perverseness”（片意地、天邪気）とみずからの内に求めている。それは「魂みずからをさいなみ——魂そのものの本性をしいたげ——悪のためにのみ悪をなそうとする不可解な魂の欲求」であり、さらに「この片意地こそは人間の心の原始的な衝動のひとつで、人間の性格に采配を振るう不可分な根源的機能または感情のひとつ」なのだ。しかるに万人が多かれすくなかれその犠牲にされるのが避けがたいこの内的衝動に対し、「哲学はなんの考慮も払わぬ」（いずれも M. III. 852）し、いまや宗教さえも無力になっているように見える。この実存意識のうちに、ポオから学ぶところのあったドストエフスキー（1821—81）のラスコールニコフへと典型化される近代的自我の萌芽を感じる人もあるかもしれない。しかしポオの主人公にあっては、自己はなお「いと高き神の姿を型取って創られた人間」（M. III. 856）として、圧倒的な驕りに拘泥されている。いまや自我人格全体が盲目的な内的破壊衝動のチャンピオンと化した自己を、なお神の似姿と信じ続けるところに、キリスト教ドグマの時代錯誤性が仄めかされる。

アナクロニズムに化した教理に代わるべきあたらしい救済の原理が見出されぬとき——ポオは「ユリイカ」への苦闘の末に代用真理には恵まれたのかもされぬ——魂は救済力を失なったものにさえしがみつこうとする。この理念と実存の亀裂からグロテスクな悪夢が立ちのぼる。天と地の両極に吊るされた実存の状況は第二の黒猫の胸もとにある白毛の形姿に暗示されている。この白い絞首台の模様主人公の注意を引くのは、またもや妻のアニムスである。かつて壁面に刻印されたブルトーの亡霊は、そこから第二の黒猫として抜け出で甦ることによって、彼におのれの所業と運命を告げ知らせにくる。男が逆吊りされた絞首台の絵がタロット・カードでも死神を表わす 13 のカードの直前に置かれて、二本の木の幹で表象されるふたつの対立命題のあいだで逃がれるべくもない受動性の姿で表わされる。試練の舞台は 12 なる獣帯の数が意味する世界の円周、「一切のものが等距離を置いて、到達不可能なほど遠く引きはなされているように思われる巨大な孤独の舞台である。」<sup>(32)</sup>この宇宙の寄るべない被造者のこころを捉える感情を名づけるとすれば、つとにキリスト教神学の立場から Rudolf Otto (1869—1937) が、「凡ての被造物の上に位するかたに対して、被造者が抱く、自ら無に沈み去る感じ」<sup>(33)</sup>——ヌミノーズ、といてよかろう。オットーに言及するユンクにあっては、numinosum (fr. L. *numen* 神霊) はある特定な心理的体験の呼称として意味を拡げ、原因はなんであれ、主体の恣意的意志活動とは無関係に生じ、逆に主体の人間を捉え支配するもので、人間はその犠牲者となるものとされる<sup>(34)</sup>。この霊的畏怖感<sup>ヌミノーズ</sup>は、「黒猫」では地下室壁面内の墓が露呈される最終タブローに至って極点に達するけれど、黒猫が語り手の無意識のうちに「魔女の化身」なるものとして現前する心的過程ですでに兆していたにちがない。この経過は分析心理学上の見方では、「片意地」という自我人格の〈劣等〉面が意識化され統合された結果、表面化してきた無意識的人格、つまり否定的霊との葛藤であり<sup>(35)</sup>、主人公を捉える畏怖感はこの能動化された無意識の様相における自我の無力感に兆すものであろう。「片意地」として説明される他我的悪霊に帰せられた内的破壊衝動について付言すれば、ユンクにあっては、神性に内包される対立として、いい換えればヘルメース文書などに表わされる〈神の息子〉とその敵役としての悪霊たる〈アンティミモン・ブネウマ〉（模倣霊）として考察されている。この悪霊は「闇の霊」として人間の肉体に宿り、「人間の魂に己れのありとあらゆる罪の傾向を実現させようとする」<sup>(36)</sup>ものである。しかし主人公は自己の靈魂

の神的起源の信仰を捨て切ることができず、ついに魂に固有の悪霊と折り合いがつけられぬまま、その虜となってしまうのである。

最後にいまいちど語り手のレベルを離れ、作家の深層心理に焦点を当てて黒猫の出所の陰の闇を見たらうで論を閉じよう。類いまれな知性と論理性に恵まれ、天上的美意識に生きた詩人にとって、妻の発病と死の恐怖を目前にしたとき、人間存在の根源的な不条理の様相はまぎれもない実相として見えたにちがいない。彼がそれまで抱いてきた詩人的信念や価値基準が覆され、善なるものが悪に転換したときこそ、黒猫の変容が招来する。現実の状況に適応を失った魂は、酒による一時的な現実逃避となんらかの救いを求めて失われた幼年時代の記憶、夢、そして神へと立ち戻るほかない。絶対的善の具現としてのキリスト教的神が彼の悪霊にかまってくれなかったことは、すでに見た。幼年時代の記憶と夢が深夜の〈原初体験〉、またはそれが非現実のものであったとしても、すくなくとも〈原幻想〉の悪夢を招き寄せるものであったことについても、前篇に見た通りである。

明きらかなのは、ヴァージニアは母と同様に死神へ供されねばならぬ、という事実。それは死へとゆっくり衰えいく妻の変容を最期に至るまで看取ることを意味する。ながびく死の恐怖、それが心を狂気に駆り立てるものになる。ブルートーが主人公から最初の暴虐を受け、片目をえぐり取られるのは、彼が泥酔して帰宅した夜、「猫が私を避けたと感じられた」(M. III. 851) ためであると語られるが、これは猫の目から見れば、主人公の顔にすくなくとも残虐な表情がうかんでいたことを意味するにほかならない。もしかしたら、それは殺意を語る表情であったかもしれない。ここであらためて警告するまでもないけれど、病妻を殺すということを通字通りに受けとってはならない。燃える水で身も心も焼きつくした男が、幼時から目にするのをもっとも恐れたもの<sup>(37)</sup>をわが視野から遠ざけようとする、いやむしろ必死にそうしようとしてしまうのではないか、という怖れである。その意味では、病妻を殺すのではなく、彼女を生きながら埋葬してしまうのではないか、という恐怖といったほうがいい。「黒猫」の翌年に発表された“The Premature Burial”（「早まった埋葬」1844）には、妻の遺骸を納骨堂に納めて三年後その鉄の扉を引き開けた夫の腕のなかに、経帷子に包まれた妻の遺骸が直立の姿勢から崩れ落ちてくる恐怖が語られているが、Roderick Usher と Madelain の例を引くまでもなく、ポオには生きながら埋葬される強迫観念があり、それがおのれの恐怖や嫌悪の対象を生きながら埋葬するという強迫——“Berenice”（「ベレニス」1835）、“The Fall of the House of Usher”（「アッシャー家の崩壊」1839）、“The Cask of Amontillado”（「アモンティリャアドの樽」1846）——へと転移されているのが認められる。早まって埋葬された者は、墓葬の外にいる埋葬した者に自分の状態を告げ知らせ、彼をも墓葬へつれこまねばならぬ。こうして〈死神〉は埋葬した者の上に直立した姿で倒れ落ちてくるのだ。他者を犠牲に供した者——神話レベルでは神の息子を犠牲に供した者——はかならずみずからも犠牲者に転化されねばならぬ、という含意において、生きながら埋葬するという行為は、おのれをも生きながら埋葬することを陰喩として含み、結局、安楽死としての自殺行為を意味するのにはほかならないのである<sup>(38)</sup>。もちろんこの所見をユンギアンの図式に当てはめて、抑圧された無意識は結局おのれを抑圧した自我意識に復讐し、併呑してしまうものである、と読みとることもできよう。

「黒猫」にあっても、妻の死骸といっしょに黒猫を生きのまま墓葬に塗りこめるという形で、早まった埋葬のモチーフが潜在しているが、この観点からすれば、病妻を殺すことも自殺することも、また病妻を安楽死させてやることも自己を安楽死させる形式として自殺することも、本質的には変りがない。ただみずからの生命を絶つことは、エレウシースの秘教で

あると<sup>(39)</sup>キリスト教正統説であるとを問わず、神的起源なるものへの危害として大罪であったから、ポオにあってそのような潜在的願望はいっさい認められぬ幻想として抑圧されざるをえなかったのはたしかである。この殺害幻想にもうひとつの潜在的願望が不可分に結びついているのを感じる人はすくなくあるまい。ポオの主人公がさきの引用文にあるように夢魔の化身たる黒猫の重みが心臓にのしかかる息苦しさを語るのは、生きながらの埋葬に伴う苦悶への不安を反映するほかに、性的願望の抑圧の存在を示している。夢魔ナイト・メア〈夜の牡馬〉には incubus (fr. L. *incubare* to lie upon, 男性夢魔) と succubus (fr. L. *succubare* fr. *sub-cubare* to lie under, 女性夢魔) があり、それぞれ睡眠中の婦女、男と情交をする悪魔とされる。ポオの主人公にとって女性夢魔たるべき黒猫が胸の上に横たわるのは、ある程度までヴァージニアが発病を機として性的呪縛力を持つ成熟した女性へと変貌する不安という前篇での仮説の力点を裏づけるのに役立つかもしれない。顕在テキストで妻を殺すという表現で表わされているものは、潜在意識における病妻を犯す怖れと対応しており、それが同時に恐怖の核心としての現世における死の過程の終末と重なり合っているところに、この作品のきわめて特異な暗喩構造が隠されているといい。作家の意識にはけっして受け容れられることがなかった無意識の霊たちの性と死のウロボロスの構図の投影劇を読みとることが、ポオの読者に委ねられているのである。

## 5. 神話は読みとれたか

本論はあらかじめ断わったように、ポオ研究において精神分析批評が果たした役割を検証するためのものであって、短篇「黒猫」に一貫した単一の解釈を与える作品論を意図したもので、ましてや本格的なポオ論を企図したものでもない。フロイト的な精神分析学によるマリー・ボナパルトの批評と、ユング的な分析的心理学に基づくロバータ・リーダーとマーティン・ビクマンの批評を概観しながら、伝記的作家論レベルでの精神分析批評と作品論的レベルを中心とする元型批評の洞察力とその批評視野の限界を検討してみた。その結果これもまえて予想されるように、フロイディアンの方法が作家個人の無意識的所与との関連において、テキストの象徴言語翻訳により深層心理の要素の解読に道を拓き、他方ユングの方法が元型のもつ一般性を通して、無意識様相の内面劇として作品に普遍性を持たせるのに役立つのが認められた。ただユング学における象徴が担う負荷は複雑で多重化されているので、作品の単一的解釈を性急に求めようとすると、ともすれば作品が核心に内在する秘められた意味の深みと関わりのないところで、無味乾燥な寓意的図式しかつかめない惧れがある。ことに個性的な幻想構造を持つポオのような作家の短い作品を対象にするときには、伝記資料に基づく作家の深層心理の分析が解釈の直接的な鍵を提供する可能性がきわめておおいといえる。

ふたたびポオに還って結論めいていえば、ポオのなかにはふたりのポオがおり、ひとりとは苦悩する〈患者〉ポオ、いまひとりとは彼の無意識の伝言を伝えようとする〈伝令〉ヘルメースとしてのポオである。作家ポオは患者が夜内部の深みから受け取る象徴的な夢の手紙をひとつの心象図として描き出す<sup>(40)</sup>。患者ポオが聖なる病にかかるのは、いにしえのデルポイのアポロンの神託所で、彼の手で退治され岩石の割れ目に投げ捨てられた大蛇ビュートンの死体から発生すると信じられた霊気を受けて神がかりとなった巫女たちと同様に<sup>(41)</sup>、地下の割れ目のようなところの無意識の深みに棲む霊たちに出会うためである。燃える水で身を焼き、密儀としての病いにかかった患者ポオは、こうしておのれの霊たちが自分の意識に対して訴え求めようとする声を聞き、これを伝令のポオが記録する。巫女の予言の恍惚状態を生じさせる

過程のひとつに、処女に蛇の目をむりやりに見つめさせ、魅惑された女が催眠状態に陥って神の声を告げることがあったといわれるが<sup>(42)</sup>、ポオの作品においても黒猫の目がその役目を代行し、黒猫の呪縛力に最初に反応するのは主人公の妻であった。作家ポオは、神託所の審神者と詩人たちがしたように、多くの場合訳のわからぬ言葉からなっている神託、つまり霊たちの言葉を解説し、人びとが聞き取りうる詩的表現形式に仕立てあげることだった。さきに引用した作品冒頭の一節で、作者が待望した「自分よりもっと冷静、論理的で、はるかに興奮しにくい知性」(M. III. 850)の持主とは、結局このような審神者、いわば患者ポオの魂の深淵に発する悪夢の手紙の解説者にふさわしい精神分析医のごとき存在なのである。これは神託の読解表現者としての詩人にとって、きわめて不本意な告白であったにちがいない。

患者ポオが陥った秘儀としての病いはあまりにも重く、内部の深みから届いた悪夢の手紙はロゴスの言語への翻訳がほとんど不可能な言葉で書かれていたのだ。作家ポオが一応の翻訳をなし終えたとき、彼に霊たちがなにを求めているかを知り、それにふさわしい犠牲や贖罪の儀式を果たし終えた安堵感が得られたかどうかはきわめて疑わしい。ポオですらも宥め祓うことができない霊であればこそ、その出処を求めて模索の旅がここまで続けられたのである。(完)

### Text

Poe の作品からの引用は特記しないかぎり刊行中の下記 Mabbott 編纂版を用い、略号 (M. 巻数. 頁数) で表わし、この版で未刊のものは次に記す Harrison 編のいわゆる Virginia Edition を参照し、略号 (V. 巻数. 頁数) で表わした。

Mabbott, Thomas Ollive, ed. *Collected Works of Edgar Allan Poe*. Vols. I-III. Cambridge, Mass. and London : The Belknap Press of Harvard University Press, 1969, 1978.

Harrison, James A., ed. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, 17 vols. New York : Thomas Y. Crowell, 1902.

ポオの作品邦訳題名は東京創元新社版『ポオ全集』第3版(1970)にしたがった。

### Notes

- (1) 『岐阜大学教養部研究報告』第17号, 1981年(1982年1月発行), 93-104頁。
- (2) See Carl G. Jung, *The Basic Writings of C. G. Jung*, trans. R. F. C. Hull and ed. Violet S. De Laszlo (New York : Random House, 1959), pp. 158-82. The relative chapter "Anima and Animus" reproduced from *The Collected Works*, Vol. 7 : *Two Essays on Analytical Psychology* (New York : Pantheon Books, 1953), Bollingen Series XX.
- (3) *ibid.*, p. 158.
- (4) *ibid.*, p. 495. Partly reproduced from *The Collected Works*, Vol. 11 : *Psychology and Religion : West and East* (1958).
- (5) Roberta Reeder, "'The Black Cat' as a Study in Repression," *Poe Studies*, 7 (1974), pp. 20-22.
- (6) *ibid.*, p. 20.
- (7) *loc. cit.*
- (8) James W. Gargano, "'The Black Cat' : Perverseness Reconsidered," *Texas Studies in Language and Literature*, II (1960), pp. 172-78. この論文は優れた代表的「黒猫」論のひとつで以下にも再録されている。W. Howarth, ed., *Twentieth Century Interpretations of Poe's Tales* (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall, 1871), pp. 87-93.
- (9) archetypal criticism. 通常、原型批評と表記されることが多いが、ユング学の元型という訳語をここでは使うことにする。
- (10) Martin Bickman, *The Unsounded Center : Jungian Studies in American Romanticism* (Chapel Hill :

University of North Carolina Press, 1980)

- (11) *ibid.*, pp. 58-79.
- (12) 高津春繁著『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店, 1960), 139-40 頁をも参照。
- (13) 詩“To Helen”(「ヘレンへ」1831)のほか, 短篇“The Assignation”(「約束ごと」1835), “Morella”(「モレラ」1835), “Ligeia”(「リジニア」1838)の4篇。ただし別章で“Eureka”(「ユリイカ」1848)も論じられている。
- (14) ポオ「ユリイカ」, 牧野信一・小川和夫訳による。東京創元新社版『ポオ全集』第3巻, 429-30頁。
- (15) Rudolf Bernoulli, “Zahlensymbolik des Tarotsystems,” *Eranos Jahrbuch 1934*. 田部淑子訳「タロット体系の象徴」, 『バイディア』10(竹内書店, 1971), 48頁参照。
- (16) 呉茂一訳『黄金のろば』(岩波書店, 1956-57), 上巻, 125-82頁。また同氏の改訳が『世界文学大系67:ローマ文学集』(筑摩書房, 1966)にあり, 同書49-71頁を参照。
- (17) Bickman, p. 63.
- (18) 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 75頁。
- (19) Erich Neuman, *Amor and Psyche* (London: Routledge and Kegan Paul, 1956). 玉谷直美・井上博嗣訳, 河合隼雄監修『アモールとプシケー』(紀伊国屋書店, 1973), 89頁参照。
- (20) C. G. Jung and C. Kerényi, *Essays on a Science of Mythology*, trans. R. F. C. Hull (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1963), Bollingen Series XXII, pp. 108-09.
- (21) *ibid.* p. 158.
- (22) François Daumas, *Les dieux de l’Egypte* (1965). 大島清次訳『エジプトの神々』(白水社, 1966), 88-89頁参照。サクメトは黄土で染めた酒を人の血と誤って飲む血に飢えた女神としても説かれている。Cyrus H. Gordon, “Canaanite Mythology” in *Mythologies of Ancient World*, ed. Samuel Noah Kramer (Gordon City, N. Y.: Doubleday & Company, 1961), p. 198.
- (23) C. G. Jung, “Psychological Aspects of the Mother Archetype,” originally published in *Eranos Jahrbuch 1938* and reproduced in *The Basic Writings*, p. 355. 野村美紀子訳『ユングの象徴論』(思索社, 1981), 222-23頁参照。
- (24) 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 158頁参照。
- (25) Rhys Carpenter, *Folk Tale, Fiction and Saga in the Homeric Epics* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1946), pp.134-35. なお死の神と熊の神話の関連については, 拙論「熊の神話——フォークナー『熊』の神話的背景——」, 『イデエ』創刊号(1968), 112-25頁参照。
- (26) *Webster’s Third New International Dictionary of the English Language*, p. 1568.
- (27) Sir James G. Frazer, *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*, Abridged Edition (1922; rpt. London: Macmillan, 1957), pp.517-25. 永橋卓介訳『金枝篇』(岩波書店, 1951-52年), 岩波文庫版(三), 139-49頁。
- (28) フレーザー, 上掲訳書142-43頁参照。
- (29) 垂直状態の遺骸がポオにはそのほか“The Premature Burial”(「早まった埋葬」1844)と, 倒立した形で“The Murders in the Rue Morgue”(「モルグ街の殺人」1841)に現われるのが注目される。
- (30) 「黒猫」のほかに“William Wilson”(1839), “The Tell-Tale Heart”(「告げ口心臓」1843), “The Cask of Amontillado”(「アモンティリャアドの樽」1846)がある。
- (31) 水田宗子著『エドガー・アラン・ポオ——罪と夢——』(南雲堂, 1982), 98頁参照。
- (32) ベルヌーリ, 『バイディア』10, 51頁。
- (33) Rudolf Otto, *Das Heilige* (1917). 三谷省吾訳『聖なるもの』(岩波書店, 1968), 32頁。
- (34) *The Basic Writings*, p. 471. Partly reproduced from *Psychology and Religion* (1958).
- (35) Marie-Louise von Franz, *C. G. Jung: Sein Mythos in unserer Zeit* (Frauenfeld: Verlag Huber, 1972). 高橋巖訳『ユング 現代の神話』(紀伊国屋書店, 1978), 76頁参照。
- (36) Carl G. Jung, *Psychologie und Alchemie* (Zürich, 1944). 池田紘一・鎌田道生訳『心理学と錬金術』, 全2巻(人文書院, 1976), II, 202頁。
- (37) 幼児エドガーが目撃したであろう母の咯血による血と, それによって喚起される死の記憶。Bonaparte, p.

461 参照。

- ③ アッシャー論でこの観点をとるものにつぎの論文がある。Maurice Beebe, "The Universe of Roderick Usher," *The Personalist*, XXXVII (Spring 1956), pp. 147-60, revised and reprinted in *Poe : A Collection of Critical Essays*, ed. Robert Regan (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1967), pp. 121-33. 該当部分は後書, p.130 参照。
- ④ Manly P. Hall, *The Secret Teachings of All Ages : An Encyclopedic Outline of Masonic, Hermetic, Cabbalistic and Rosicrucian Symbolical Philosophy* (Los Angeles, 1928). 大沼忠弘他訳『古代の秘儀』(人文書院, 1980), 115 頁参照。
- ⑤ フォン・フランツ, 71-72 頁参照。
- ⑥ ホール, 299 頁参照。ただし, ロベール・フラスリエール著『ギリシアの神託』戸張智雄訳(白水社・1963 年)では, デルポイ神託所奥の院の地中からの霊気発散は確認されたものと見なされず(79 頁), かわりにビューティーたちがカッソティスの泉の水を飲むこと(78 頁), アポローンの神木月桂樹の葉をかむこと(82 頁)が言及されている。
- ⑦ ホール, 302 頁参照。

### A Selected Bibliography

- Apuleius. *The Golden Ass*. Trans. W. Adlington. London : Loeb Classical Library, 1928. 『黄金のろば』文庫版 2 巻。吳茂一訳。岩波書店, 1956-57。
- Bachelard, Gaston. *La Psychanalyse du feu*. Paris : Gallimard, 1938. 『火の精神分析』前田耕作訳。せりか書房, 1969。
- *L'eau et les rêves : essai sur l'imagination de la matière*. Paris : Corti, 1942.
- 『水と夢——物質の想像力についての試論——』小浜俊郎・桜木泰行訳。国文社, 1969。
- Basler, Roy P. *Sex, Symbolism, and Psychology in Literature*. 1948 ; rpt. New York : Octagon Books, 1967.
- Beebe, Maurice. "The Universe of Roderick Usher." *The Personalist*, XXXVII, Spring 1956, pp. 147-60.
- Bernoulli, Rudolf. "Zahlensymbolik des Tarotsystems." *Eranos Jahrbuch 1934*. 「タロット体系の象徴」田部淑子訳。『バイデシア』10。竹内書店, 1971, 44-55 頁。
- Bickman, Martin. *The Unsounded Center : Jungian Studies in American Romanticism*. Chapel Hill : University of North Carolina Press, 1980.
- Bonaparte, Marie. *Edgar Poe : Etude psychanalytique*. Paris : Denoël et Steele, 1933. Trans. by John Rodker. *The Life and Works of Edgar Allan Poe : A Psycho-Analytic Interpretation*. London : Imago Publishing, 1949.
- Carlson, Eric W. *The Recognition of Edgar Allan Poe*. 1966 ; rpt. Ann Arbor : University of Michigan Press/Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Carpenter, Rhys. *Folk Tale, Fiction and Saga in the Hemic Epics*. Berkley and Los Angeles : University of California Press, 1946.
- Cirlot, J. E. *A Dictionary of Symbolism*. Trans. Jack Sage London : Routledge & Kegan Paul, 1962.
- Daumas, François. *Les dieux de l'Egypte*. Paris : Collection Que Sais-Je? 1965. 『エジプトの神々』大島清次訳。白水社/文庫クセジュ, 1966。
- Davidson, Edward H. *Poe : A Critical Study*. Cambridge, Mass. and London : Belknap Press of Harvard University Press, 1957.
- Frazer, Sir James George. *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*. Abridged ed., 1922 ; rpt. London : Macmillan/St. Martin's Library, 1957. 『金枝篇』文庫版全 5 巻, 永橋卓介訳。岩波書店, 1951-52。
- Freud, Sigmund. *The Basic Writings of Sigmund Freud*. Trans. A. A. Brill. New York : Random House/Modern Library, 1938.

- 『フロイト著作集』 全8巻。懸田克躬・高橋義孝他訳。人文書院, 1968-74。
- Fromm, Erich. *The Forgotten Language : An Introduction to the Understanding of Dreams, Fairy Tales and Myths.* New York : Rinehart, 1951. 『夢の精神分析——忘れられた言語——』外山大作訳。東京創元新社, 1953。
- Gargano, James W. “‘The Black Cat’ : Perverseness Reconsidered.” *Texas Studies in Language and Literature*, II (1960), 172-78.
- “The Question of Poe’s Narrators.” *College English*, XXV (December 1963), 177-81.
- Gordon, Cyrus H. “Canaanite Mythology.” *Mythologies of Ancient World.* Ed. Samuel Noah Kramer. Gordon City, N. Y. : Doubleday, 1961.
- Hall, Manly P. *The Secret Teachings of all Ages : An Encyclopedic Outline of Masonic, Hermetic, Cabbalistic and Rosicrucian Symbolical Philosophy.* Los Angeles : Philosophical Research Society, 1928. 『古代の秘儀』大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳。人文書院, 1980。
- Halliburton, David. *Edgar Allan Poe : A Phenomenological View.* Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1973.
- Howarth, W., ed. *Twentieth Century Interpretations of Poe’s Tales.* Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall, 1971.
- Jung, Carl Gustav. *The Basic Writings of C. G. Jung.* Trans. R. F. C. Hull and ed. Violet Staub de Laszlo. New York : Random House/Modern Library, 1959.
- 『ユング著作集』全5巻, 高橋義孝他訳。日本教文社, 1970。
- 『ユングの象徴論』野村美紀子訳。思索社, 1981。
- 『心理学と錬金術』全2巻, 池田紘一・鎌田道生訳。人文書院, 1976。
- Jung, C. G. and C. Kerényi. *Essays on a Science of Mythology : The Myth of the Divine Child and the Mysteries of Eleusis.* Trans. R. F. C. Hull. Revised ed. Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1969. Bollingen Series XXII.
- Jung, Emma. *Ein Beitrag zum Problem des Animus.* Zürich : Rasher, 1947.
- “Die Anima als Naturwesen.” *Studien zur Analytischen Psychologie C. G. Jungs.* Zürich : Rascher, 1955.
- 『内なる異性——アニムスとアニマ——』笠原嘉・吉本千鶴子訳。海鳴社, 1976。(エンマ・ユングの上記2論文の訳書)
- Ketterer, David. *The Rationale of Deception in Poe.* Baton Rouge and London : Louisiana State University Press, 1979.
- Krutch, Joseph Wood. *Edgar Allan Poe : A Study in Genius.* 1926 ; rpt. New York : Russell & Russell, 1965.
- Lawrence, David H. *Studies in Classic American Literature.* 1923 ; rpt. New York : Viking Press, 1964.
- Newmann, Erich. *Amor and Psyche : The Psychic Development of the Feminine : A Commentary on the Tale by Apuleius.* London : Routledge and Kegan Paul, 1956. 『アモールとプシケー 女性の自己実現』河合隼雄監修, 玉谷直實・井上博嗣訳。紀伊国屋書店, 1973。
- Ostrom, John Ward, ed. *The Letters of Edgar Allan Poe.* 2 vols. 1948 ; rpt. New York : Gordian Press, 1960.
- Otto, Rudolf. *Das Heilige : über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen.* 1917. 『聖なるもの』山谷省吾訳。岩波書店, 1968。
- Quinn, Arthur Hobson. *Edgar Allan Poe : A Critical Biography.* 1941 ; rpt. New York : Cooper Square Publishers, 1969.
- Quinn, Patrick F. *The French Face of Edgar Poe.* 1957 ; rpt. Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press/Arcturus Book, 1971.

- Reeder, Roberta. "‘The Black Cat’ as a Study in Repression." *Poe Studies*, 7 (1974), 20-22.
- Regan, Robert, ed. *Poe : A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1967.
- Thompson, G. R. *Poe's Fiction : Romantic Irony in the Gothic Tales*. Madison : University of Wisconsin Press, 1974.
- von Franz, Marie-Louise. *C. G. Jung : Sein Mythos in unserer Zeit*. Frauenfeld : Verlag Huner, 1972. 『ユング 現代の神話』高橋巖訳。紀伊国屋書店, 1978。
- Weber, Jean-Paul. "Edgar Poe or The Theme of the Clock." Trans. Claude Richard and Robert Regan. *La Nouvelle Revue Française*, 68 (August 1958), 301-11 and 69 (September 1958), 498-508.
- Wilbur, Richard. "The House of Poe." Originally presented as a lecture at the Library of Congress in 1959, later compiled into Robert Regan, ed., *Poe : A Collection of Critical Essays*, 98-120.
- 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』。岩波書店, 1960。
- 水田宗子『エドガー・アラン・ポオの世界——罪と夢——』。南雲堂, 1982。